のと横方向から連続して密に刺突するものがあり、５種は前者、６種は後者が多い。７種には沈線で区画された雲形文やネガ文様が見られるが、土器群全体では主体となる文様要素ではない。

④　地　文

１～５種は斜縄文が多い。５種には縦走する条痕文を施した台付き土器が１個体のみある（26）。６種は縦走縄文が主体となる。斜縄文も見られるが、やや施文が乱れたものが多い。原体は単節ＲＬが高い比率で用いられる。各種とも少数ではあるが、地文が無文なものを含んでいる。

これら８種は遺物集中では一体となって土器群を形成しているが、放射性炭素年代測定の結果では内部で時間差がある可能性が高い。そこで、遺物集中の出土状況について、Ａ、Ｂ、Ｃの各群でこれら８種がどのようなセット関係にあるのか、出土位置に微妙な上下がなかったかを再確認してみる。

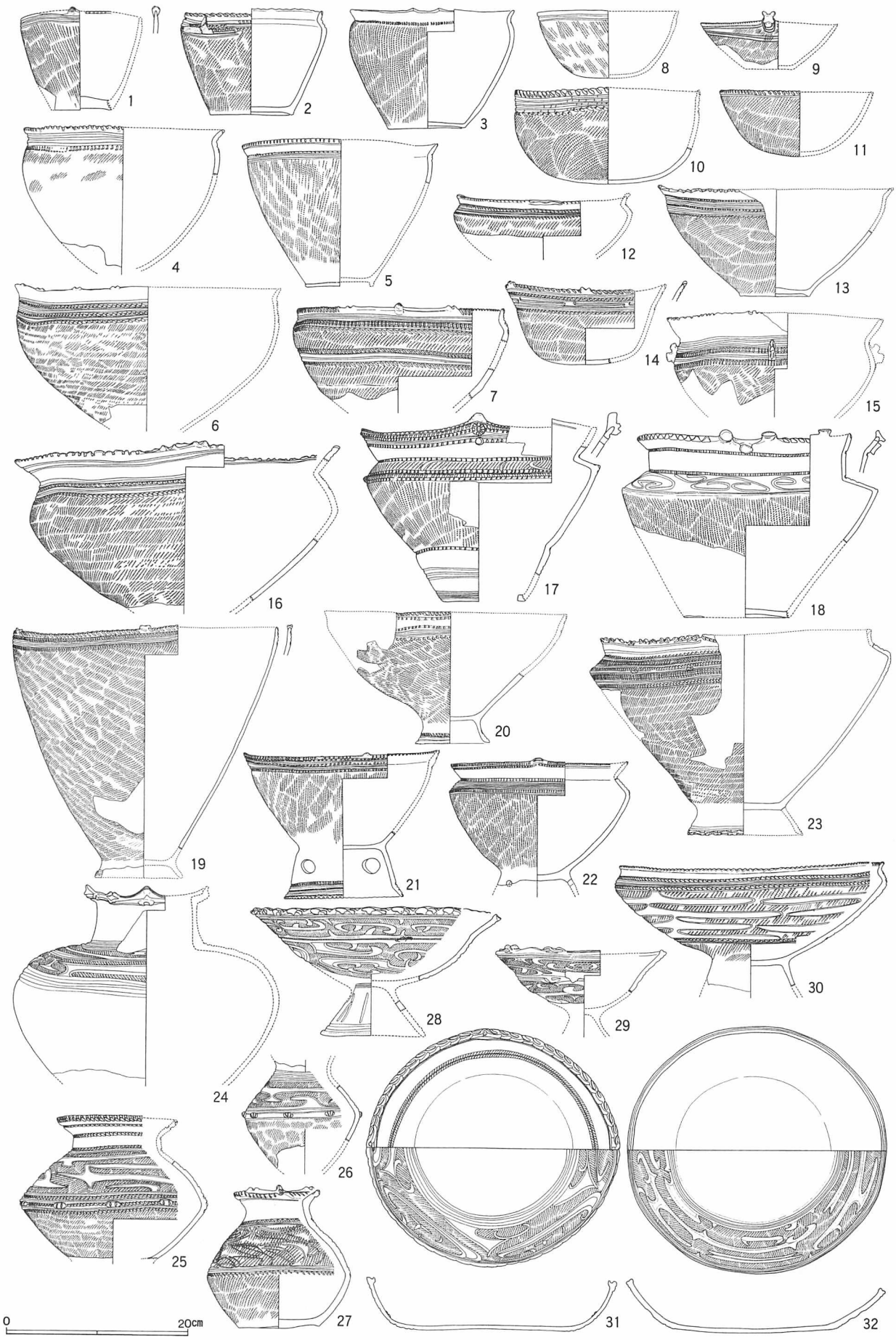
Ａ群は１・４～８種が出土し、２・３種は見られない。Ｂ群は１～７種が出土し、８種は見られない。Ｃ群は４～８種が出土し、１～３種は見られない。８種は非常に個体数が少なく、特殊な用途が想定されるので、各群の主要な構成要素としては省かれる。１～７種を比較すると、Ａ群とＣ群はほぼ同じ構成で、２・３種を欠いて４～６種が主体となる。一方で、Ｂ群は１～７種のすべてが内包されている。Ａ・Ｂ群で得られた放射性炭素年代測定値の時間幅から、１～７種には時期差が存在し、４～６種はその中でも後半に位置する可能性が高い。このことを検証するため、各群内部で出土位置より新旧を推測する。Ａ群では10（５種）が77（７種）よりも上位で出土している。また、16（６種）は18（１種）よりも上位で出土している。Ｂ群では17（６種）と26（５種）はほぼ同じ高さで、７（１種）・８（２種）・21（４種）よりも上位である。Ｃ群では24（５種）が９（４種）よりも上位で出土する例が認められる。以上の点から、１・２・（３）→４→７→５・６という変遷が想定される。

本遺跡出土のＶ群ｂ類の編年的位置は、①赤彩された精製土器(77)に施された文様帯が幅狭で、雲形文が平行化していること、②地文に条痕文が施された台付き鉢(26)が見られること、③独立並置型ネガ文様（高橋　1993）が施された台付き鉢(25)が見られることから、おおむね大洞Ｃ$_2$式古段階に相当すると考えられる。77は津軽海峡周辺からの搬入品と推測され、縄文の繊細さや胎土の緻密さなどの点でも他と異なる。26はいわゆる「桃内式」（名取・松下　1964）に属し、東北地方の晩期中葉の条痕文土器との関連が指摘されている（竹田・土屋・大島　1973、鈴木　1996）。25は石狩市シビシウス第４遺跡（石橋編　1979）でも類似資料が出土しており、このネガ文様が浜中大曲式を大洞Ｃ$_2$式並行に位置付ける根拠の１つとされる（福田　2003）。ただし、本遺跡のＶ群ｂ類には前述の変遷が認められるため、やや古い段階のもの（大洞Ｃ$_1$式新段階？）を含む可能性がある。

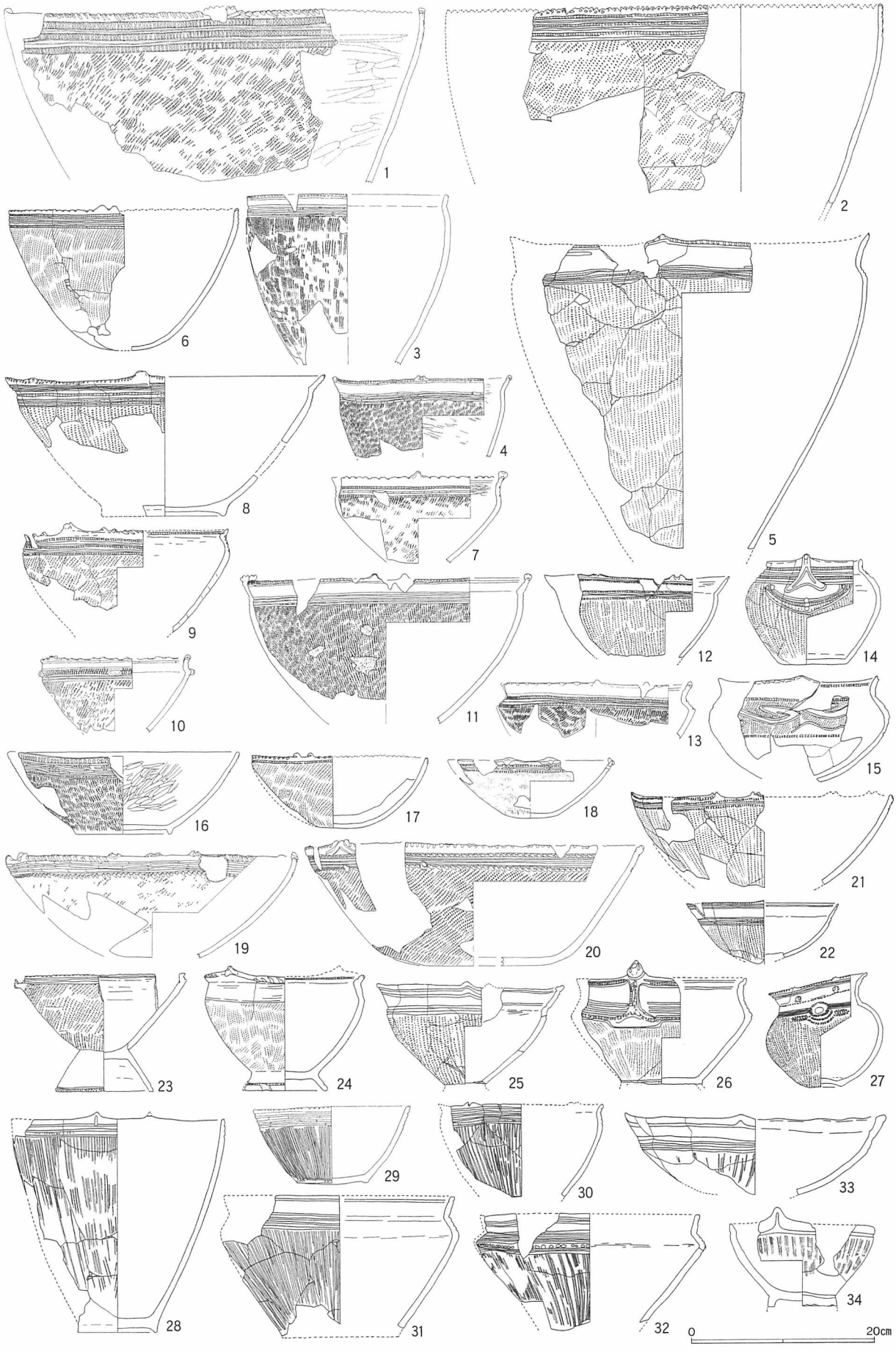
２　いわゆる「浜中大曲式」土器について

（１）研究史

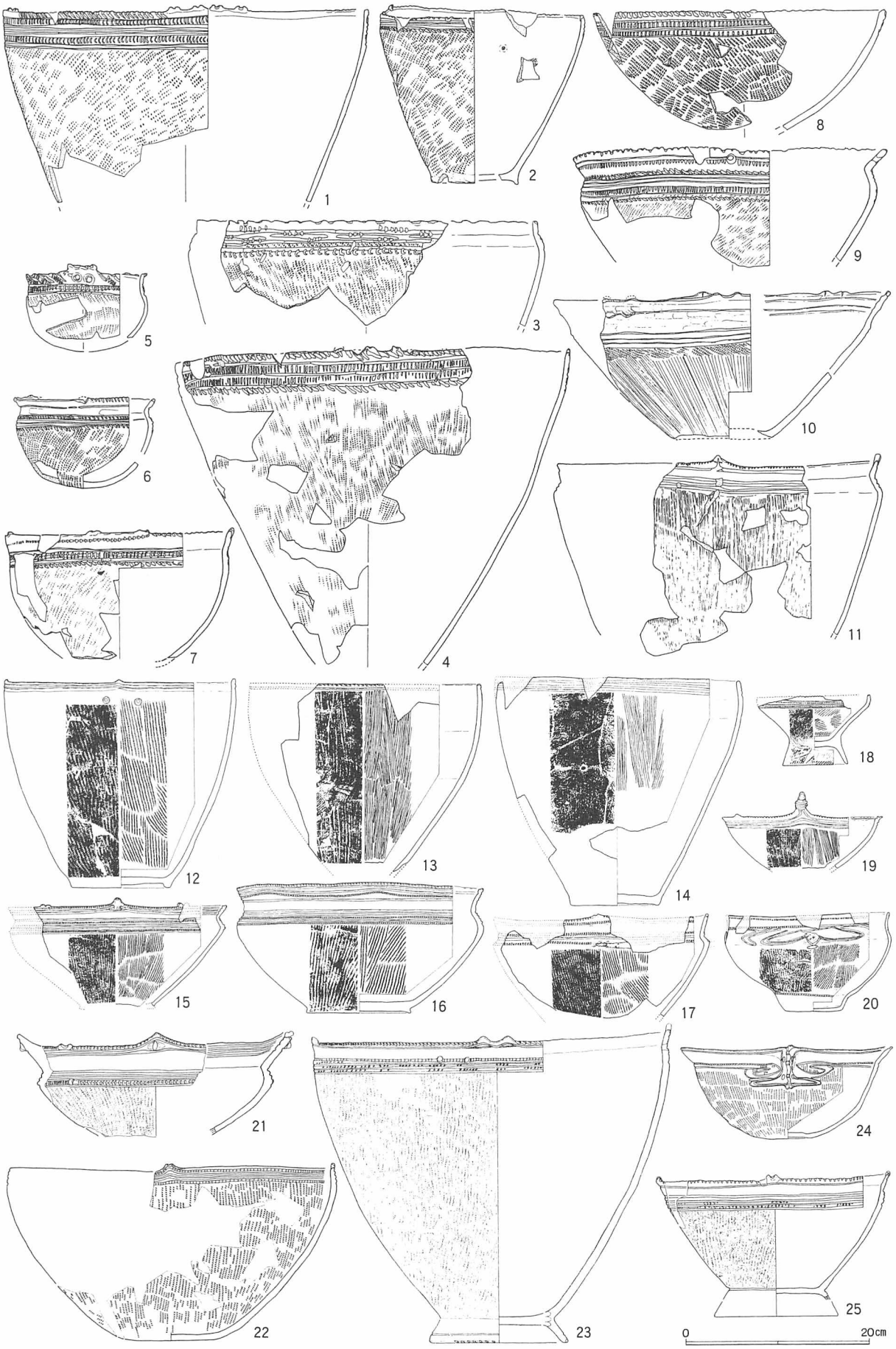
浜中大曲式は、余市町大浜中遺跡を標識遺跡とし、吉崎昌一氏らによって仮称されたが、報告書作成前に資料が焼失したため、その内容は長い間不明であった（吉崎　1965）。1978年、石狩市シビシウス第４遺跡において墓に伴う良好な一括資料が出土したことから（石橋ほか　1979）、現在はこれが標識として認知されている（林　1981、野村　1984）。その内容は、口唇に刻みを加え、口縁部に数条の平行沈線を巡らし、その内部に連続する刺突列を施した鉢、浅鉢、肩部が強く屈曲した壷、雲形文が施された台付き鉢、皿などである（図Ⅶ－２－１）。林謙作氏は北海道における縄文時代晩期土器を、「亀ヶ岡式土器そのもの、あるいは若干の地方色を帯びた土器」、「亀ヶ岡式土器の影響のもとに成立した在地的な要素の強い土器」、「亀ヶ岡式土器の影響の影響がまったく認められない北海道固有の土器」の３つに区分し、それぞれ「大洞系」、「類大洞系」、「非大洞系」と呼び、時期によりこ



図Ⅶ－２－１　「浜中大曲式」土器(1)
（1～32：シビシウス第４遺跡）



図Ⅶ－２－２　「浜中大曲式」土器(2)
（１～34：大川遺跡）



図Ⅶ－２－３　「浜中大曲式」土器(3)
（１～11堀株１遺跡、12～20：渋井遺跡、21～25：浜中２遺跡）

れらが混成して地方的な形式を構成するとした。そして浜中大曲式を大洞C$_2$式並行の類大洞系土器とし、シビシウス第４遺跡出土資料のほか、吊手双口土器や舟形鉢など特殊な器形を特徴に挙げ、晩期後葉の幣舞＝タンネトウＬ式への系譜に位置付けた（林　1981）。

その後、浜中大曲式は余市町大川遺跡（岡田・宮　2000、乾ほか　2000a・2000b・2000c・2001a）、泊村渋井遺跡（内山　1985b）、同堀株１遺跡（田部・村上　2004）など積丹半島周辺で報告例が増加した（図Ⅶ－２－２・３）。また、礼文島の浜中２遺跡でも、同じ形式内容を備えた土器が出土し（設楽編　2001）、日本海岸北部へ分布が広がる可能性が指摘されている（福田　2002・2003）。

近年、福田正宏氏により、北海道の縄文晩期土器を１～５期に細分する編年案が提唱された。それによれば、従来の浜中大曲式は３期に相当し、「亀ヶ岡式土器」系統の「浜中大曲式」と「在地系土器」系統の「無文帯系土器」から構成され、大洞C$_2$式古段階に相当するという（福田　2003）。

（２）形式内容

吉崎氏が当初形式設定した段階では、「渡島半島で発見される土器よりも簡単な文様－口縁下に平行のほそい沈線とそのあいだをうずめる連続刺突文、地文として縄文のかわりに縦位に付された平行沈線様の擦痕などによって代表される、異形土器の多い浜中大曲式と仮称される土器群」、「名取武光・松下亘らによる桃内式土器もこの仲間である」とされていた（吉崎　1965）。すなわち、本来の「浜中大曲式」が条痕文を地文とする土器群を包括することは明らかである。桃内式は小樽市桃内貝塚を標識遺跡とし、第２類（縄文）、第３類（条痕文）、第４類（無文）を形式内容とする（名取・松下　1964）。一般的には、第３類土器を「桃内式」と呼称することが多いようである。しかしながら、本来の「桃内式」は縄文・無文を含めた土器群の総称であり、本来の「浜中大曲式」と形式内容に差異は認められない。これまで「浜中大曲式」と「桃内式」は、同一の土器群の異なる側面、例えば地文が縄文か条痕かなどで区分されてきたと言える。近年では、大川遺跡の出土例などから、条痕文土器は主体的には存在せず、粗製土器の一種として捉える考えも示されている（乾ほか　2000c）。

ところで、シビシウス第４遺跡では条痕文を地文とする土器は出土していない。これは遺跡が墓域であることに起因すると考えられる。桃内貝塚や渋井遺跡、大川遺跡の出土例から、おそらく「浜中大曲式」に伴う条痕文土器は粗製土器が大半であろう。このため、墓の供献土器など精製土器を主体とするシビシウス第４遺跡では、条痕文土器が持ち込まれなかったのではなかろうか。よって、この遺跡の資料は本来の「浜中大曲式」全体の形式内容を把握するには不十分と言える。

「浜中大曲式」については、現在までのところ最も資料が充実している大川遺跡、もしくは周辺の遺跡を含めて、形式内容を再検討すべきである。これにより、積丹半島を中心とする「浜中大曲式」土器が、周辺地域へ波及した様相が明らかになると思われる。さらに、石狩低地帯におけるタンネトウＬ式成立までの空白を考察する前提として非常に重要である。このことは、日本海側地域で大洞C$_2$式～大洞Ａ式相当とされる聖山式（芹沢編　1979、吉崎編　1979）を主体とする遺跡が見られないことと関連すると考えられる。また、生渕２遺跡の遺物集中と同様に、シビシウス第４遺跡や大川遺跡などの内部でも出土資料に新旧が認められそうである。「浜中大曲式」は大洞C$_1$式から大洞C$_2$式にまたがる時期の土器形式で、数段階に細分される可能性がある。

今回は筆者の力量不足により、いわゆる「浜中大曲式」の具体的な形式内容や編年を提示するに至らなかった。この問題については、自己の課題として今後追求したいと考えている。　（芝田直人）